

◇ 論 文 ◇

## 精神世界と日本の福音派

——米国大統領選挙の視座から

伊藤 耕 一 郎

はじめに

現在の社会情勢に違和感や閉塞感を抱いていない人はほぼいないだろう。インターネット上には、「社会の出来事の背景には何らかの策謀があったのではないかという」陰謀論（田中 2014：6/2552）が氾濫している。そして、SNS 上ではこれまで関心を示さなかった人々が、「ワクチンによって人類は支配される」というような出処の分からない情報の真偽についての議論を行っている。

陰謀論は今に始まったものではない。田中聡は、これまでの社会は陰謀論の内容ではなく、「陰謀論的な考え方」そのものを拒絶してきたという（田中 2014：6/2552）。しかし、現代の社会情勢を見る限り、コロナ・パンデミックが「陰謀論的な考え方」を拒絶しない社会を生み出したのではないかと、筆者は思料するのである。

こうした社会情勢の中で、これまで直接関係の無かった団体や個人が偶然に同じ情報を発信するという事象が見られるようになってきた。

堀江宗正は、その1例として、宗教弾圧を続ける中国政府に対して宗教団体が匿名の SNS アカウントを使って所属を隠して情報発信を行った場合、（教団同士の連携がなくとも）「複数の教団の偶発的な共闘」が生じるとしている（堀江 2021：23）。

今回筆者は、この「偶発的な共闘」と堀江がいった現象の1例として、「精神世界」と「日本の福音派（キリスト教）」から米国大統領選挙の前後に類似した情報が発信されたことを取り上げることにした。本論文は、この「偶発的なシンクロ現象」を事例として、今の社会情勢の一面を分析したものである。

## 1 研究対象について

本論文で「精神世界」と「日本の福音派」の偶発的なシンクロ現象を事例として取り上げるにあたり、日米における両者の関係について述べる。

### (1) 「ニューエイジ」と「米国福音派」

精神世界と米国福音派を比較するにあたり、両者はアメリカにおいて「既存のキリスト教」に対する批判的な文脈から出てきたということを押さえておく必要がある。

欧米で興隆したニューエイジ運動<sup>1)</sup>について島藪は「この潮流に属する人々はもはや伝統的な宗教は過去のものとなりつつあり、自らはそれとは異なる新しい霊性（spirituality）を求めるものだと主張」し（島藪 2012：472）、その支持者は「キリスト教、イスラーム、ユダヤ教、仏教などの既成宗教に対して概して否定的」だとしている（島藪 2012：476）。

一方の米国福音派は信仰の回帰運動の1つであって個別の教派を指すわけではない。米国の「建国の精神」でもあるピューリタニズムは、「中途半端な宗教改革に飽き足らない人びとが、教会のさらなる純化（ピュア化）を求めて始めた運動」だとされている（森本 2015：33）。アメリカのキリスト教は、「神と人間の双方がお互いに履行すべき義務を負う」ギブアンドテイクの契約関係で、人間が従えば神は恵を与え、背けば滅びを与えるものであり、アメリカの繁栄は神への契約を守ったからだと考えられてきた（森本 2015：23-24・27）。

しかし第2次世界大戦後の自由主義神学<sup>2)</sup>の影響による教会の世俗化は

アメリカにも広がり、学校での祈祷を違憲とする判決が、1960年代以降相次いで出され、子供たちが学校で祈る慣習は廃れていった。保守的なキリスト教徒からは「多様性を尊重する方向へと進んできたその後のアメリカの社会の姿」は、「『世俗化』『リベラル化』によるキリスト教的伝統の衰退」とみなされるようになった。米国福音派は、これらを根として「古き良き時代」に戻ることを願う人々の中から台頭してきたものである（根田 2021：12）。

ニューエイジも米国福音派もアメリカの「既存のキリスト教」への反対運動として興隆してきたという共通点を持っている。しかしニューエイジは「組織された教団を構成して、権威に基づく共同体」に対して否定的で（島藪 2012：476）、米国福音派もこの中に含まれている。また、米国福音派側も「ニューエイジはサタンから下されたいにしへの偽りの教え」だとしてこれを否定しており（Pearce 2007：410/648）<sup>3)</sup>、両者は対立関係にある。

### (2) 「精神世界（ニューエイジ）」と「日本の福音派」

日本の福音派においても、精神世界（ニューエイジ）について「これは現代社会において教会が最も警戒しなければならない、悪霊の働きの1つ」（滝元 2007：177）として否定する教派・教会は少なくない。しかし、「彼らが環境問題や食品公害問題、専門分化しすぎた医療の問題などに発している警告には耳を傾けるべきであると思う」、「いずれは分離せざるをえないであろうことも、わきまえておく必要がある」が、ライフ・スタイル面で表面的な「共闘」はありえる（水草1995：154-155）として一定の理解を示す見方も存在している。

一方、精神世界側には伝統的宗教に対して好意的な側面が見いだされてきており（伊藤 2018：99）、精神世界と親和性のある宗教としてキリスト教をあげる精神世界関係者も存在するなど（伊藤 2020：6-7）、「日本における精神世界（ニューエイジ）と福音派の関係」と「アメリカにおけるニューエイジと福音派の関係」は同じではない。

## 2 本論文において対象とする日本の福音派

本論文では、精神世界（ニューエイジ）の日米間の違いは問題にならない程度のものであるため同様に扱う<sup>4)</sup>。

しかし、「米国福音派と日本の福音派」は同じものとして扱うことはできない。その理由について、「日米福音派の共通点」、「日米福音派の背景と相違点」、「日本の福音派の現状」についての順で確認をしていく。

### (1) 日米福音派の共通点

鈴木崇巨は「『福音派』という言葉には、『私は自由主義的な（リベラルな）聖書解釈をするではありません』（中略）という意味が含まれている」とし、リベラルに対して聖書を字義的に解釈する「信仰の傾向」だとする（鈴木 2019：65）。日本の福音派は日本基督教団から戦後に分離独立した聖書信仰についてより厳格な諸教団とされている（千代崎 2002：962）。

日米福音派とも聖書解釈において厳格かつ保守回帰的で、「聖書は誤りなき神の言葉」として「同性愛の否定」、「人工中絶の忌避」、「進化論の否定」などの共通点を有している。

### (2) 日米福音派の背景と相違点

しかし、具体的な回帰像については米国福音派と日本の福音派には明確な違いが見られる。米国福音派の回帰像は「建国以来の『古き良きキリスト教的なアメリカ』の伝統」にあるとされる（根田 2021：12）。

これに対して日本のキリスト教の歴史は「キリスト教の排除と結びついてきた歴史」であり、キリスト教は日本にとって異物であり続けた（根田 2021：13）。戦前（1941年）にプロテスタント諸教派が合同して成立した日本基督教団では「皇道の道に従い、皇運を扶翼し奉る」ことが教団の規則の1つとされ、戦勝祈願や飛行機献納、奉国奉仕などの国策協力・戦争協力が行われた（最上 2014：74）。これらに対する反動が日本の福音派が

戦後に興隆してきた背景となっている。

それゆえ日本の福音派は伝統回帰を、歴史的過去への回帰に求めることができず具体像を欠いた状態にある。根田祥一は、「『愛国心』や『伝統』が高調される文脈が日米では異なる」ため、日本の福音派と米国福音派とは話が噛み合わないこともある（根田 2021：13）と同じ「福音派」という言葉を使っている、両者には違いがあるとしている。

### (3) 日本の福音派の現状

日本の福音派では、1968年に世界福音同盟（WEA）<sup>5)</sup>の呼びかけにより、福音派信仰に立つ諸教会や個人が参加し全国組織として日本福音同盟（JEA）が創立された（千代崎 2002：962）。

JEA は福音派の包括団体ではなく、「聖書信仰に立つ福音的諸教会の交流・協力機関」として位置づけられている<sup>6)</sup>。JEA では「聖書信仰を育む」、「福音の進展」、「教団、教派、諸教会の一致」、「聖書的な『国家観』を求め、社会問題に対応」、「アジア及び世界の諸教会との協力の窓口」の5つを主な役割としているが、いずれも世界の中の教会、聖書の価値観の上になされるものであり政治関連の声明を出す場合でも「JEA が発する声明は、政治的な主張ではなく信仰表明」であるとしている<sup>7)</sup>。

2018年には、トランプの政策についていくつかの加盟教会が支持をしたことを受けて「トランプ大統領が就任してから、エルサレムの首都宣言など過激な発言が続いていますが、（中略）この状況に対し、私たち日本の福音派がどう応答するのかが再び問われているように思います。」（宮崎 2018：6）と警告を発している。

とはいうものの、JEA には包括団体としての指導権はなく、方針に合致しない教会・教派や、また JEA に加盟していない福音派も多く存在するため日本の福音派に不透明な部分があることは否めない。

そこで筆者は日本の福音派をその特徴から3つのグループに分類し<sup>8)</sup>、「本論文において研究対象とする日本の福音派」を定めることにした。

## ① 伝統的聖書解釈グループ

日本基督教団から独立した諸教団や新設された「聖書信仰と伝統的なキリスト教教理」、「救霊と伝道との情熱」によって形成された教派・教会（藤本 2015：1521/3047）。聖書を人類救済のために書かれたものとして解釈し、全ての時代において同じ福音によって人は救われるとしている（中川 2019：202-203）。教団を形成する日本の福音派の大半は、このグループに属する（第6回日本伝道会議 2016：27-30）。

## ② 字義的聖書解釈グループ

聖書が書かれた目的は人類救済のためではなく「神の栄光」のためだとし（中川 2019：202）、比喩的解釈をまじえず、「一貫した字義通りの解釈」で聖書解釈を行う（中川 2019：185）<sup>9)</sup>。また終末論においては、大難難時代<sup>10)</sup>が来る前にキリストを信じるものは、空中へ挙げられて（天国に入るので）難難時代を通ることはないとする「難難前携挙説」の立場をとっている（中川 2019：198）<sup>11)</sup>。

日本では、元テレビ伝道者であった中川健一の主宰する「ハーベスト・タイム・ミニストリーズ」が中心的な存在で、多くの支持を集めている<sup>12)</sup>。

## ③ 力の伝道（パワーエバンジェリズム）グループ

未信者は、悪魔や悪霊の支配下にあり操られているため、人を束縛する悪霊<sup>13)</sup>を追い出すことが宣教の鍵であるとし、聖書を「悪霊との戦い」の文脈において解釈する。

このグループの牽引者である滝元順は、日本の宣教を妨げている原因の1つが地域を支配する悪霊だとする。滝元は、「現代の町並みは十年もすれば全く景観が変わってしまいますが、神社だけは動くことなく同じ状況を保っています。ここに恐れを用いて地域の人々を束縛する悪魔の策略があります」（滝元 2007：126）と神社仏閣が悪霊による支配の基盤となっている<sup>14)</sup>。

また、「前世代や親などが家族及び一族全体や個人を悪しき霊にささげ

るという事などによって、悪しき霊の門が開かれそれらを通しての霊的な束縛」がある（尾形 2003：45）、「悪魔の素がどこにあるのかといえば『家系』という地下の根の中に、彼らの最も大きな秘密基地がある」（滝元 2007：110）として先祖が犯した罪の悔い改めの必要性が説かれているのも特徴の1つである<sup>15)</sup>。

精神世界に対しては他の2つのグループよりも否定的で、精神世界の具体的な技法を忌避するものとしてあげ<sup>16)</sup>、「日本の宣教を妨げてきた霊の戦いの具体的障害」の原因として「ニューエイジがはびこっている」としている（尾形 2003：55-56）。

力の伝道において最重要視されるものが「祈り」であり「祈りは悪魔が最も嫌うものである。だから、悪魔も信者が祈るのを何とか妨害しようとする」（尾形 2003：193）と祈ることに最大限の時間を割くことを勧めており、プレイヤーズウォーク<sup>17)</sup>や24時間連鎖祈禱<sup>18)</sup>などを行っている。

この3つのグループのうち、第2グループと第3グループは信徒層が重なっていることが多く、両方の特徴を併せ持っている教会も多い<sup>19)</sup>。

本論文では第2グループと第3グループに属する教派・教会・信徒を研究対象とし、単に「福音派」と記した場合、後者の2つのグループを指すものとし、第1グループを含める際には「日本の福音派」と記す。

## 3 精神世界と福音派－米国大統領選挙と両者の類似点

精神世界に対して福音派が否定的であると先に記したが、2020年の米国大統領選挙について両者が発信している内容は極めて類似している。筆者は両者からインターネットに発信された内容を抜粋し<sup>20)</sup>、「精神世界関係者がインターネット上で発信したもの」、「福音派がインターネット上で発信したもの」から類似した内容を5つずつ抜粋し、「類似点の検証」を行った<sup>21)</sup>。

また、「匿名の SNS アカウントが教団への所属を隠して情報発信を

行った場合、スピリチュアリティ現象として誤認される場合がある」（堀江 2021：23）との指摘があるため、現地調査及び関係者からの聞き取りを行い、精神世界関係者によるインターネット上での書き込みについての検証をしている。

(1) 精神世界関係者がインターネット上で発信したもの

- 1 目を覚ましたらトランプ大統領に愛の光を注ぎましょう。
- 2 （宇宙意識によって）大統領選挙選挙で光の天使が勝つことが約束されました。時代はレムリアへと向かいます。
- 3 日本の祈りが鍵になってきます。あなたの上の存在、あなたの信じる存在に祈りのパワーを込めて光をアメリカに届けましょう。
- 4 ディープステートは既に壊滅状態。あと一息です、コロナが開いた道を閉ざしてはいけません。悪魔崇拝者達が当選することはありません。
- 5 次の時代<sup>22)</sup>が訪れます。この暗闇の2年間を乗り切って次の地球に生き残れる人々を残していきましょう。

(2) 福音派がインターネット上で発信したもの

- 1 おはようございます。今朝も家族でトランプ大統領のための祈りの時間を持ちました。
- 2 神は既にトランプを祝福し選んでおられます。御子の再臨の時が近づいた今を感謝しましょう。
- 3 他人事ではありません。私たちの執り成し<sup>23)</sup>が神の義をアメリカだけでなく、世界にもたらすのです。
- 4 もしあなたが聖書を信じるクリスチャンなら、神を信じキリストを信じていると同時に、悪の実体であるサタンの存在も信じておられるでしょう。

聖書の終末預言には悪の組織がその実体を現し、私たちに對抗してくることが預言されています。しかし悪魔は滅びます。一緒に滅びに向かうことがないように。

5 携挙が目の前の今、今サタンは携挙からクリスチャンを引き離そうと必死です。彼らは神の国に入る人を減らそうとしています。そのような人を当選させてはいけません。

(3) 精神世界関係者への調査及び聞き取り

先に述べた通り、インターネットに見られる精神世界関係者の書き込みは、特定教団からの書き込みである可能性も否定できない。そのため、今回筆者がとりあげた書き込み内容について、精神世界関係者への聞き取り及び現地調査から得た内容と照らし合わせ検証を行った<sup>24)</sup>。

① チャネリング報告会——現地調査（2020年10月31日 西宮市）

UFO とチャネリングができるという板前が主催して、ふぐ鍋を兵庫県西宮市にて行った。目的は宇宙人から受け取ったメッセージを伝えるため、「トランプ大統領の当選が確定した」、「トランプ大統領の再選を祝して弥栄!」のかけ声でふぐ鍋を囲んでの飲み会が行われた。

また、この日の参加者の多くから、トランプの再選が宇宙意識から示されたことについての報告がなされた。

② 医師（40代女性 ドイツ在住）——聞き取り（「宇宙お茶会」

2020年11月15日 ZOOM)

この一見敗北のように見える状態が作り出されることによって、アメリカ人の中に新に宇宙の意識に目覚める人が現れ、ディープステートは壊滅的になる。選挙は実質トランプの勝ちである。

③ パワースポット案内人（50代男性 滋賀県在住）——（聞き取り2020年11月22日 対面）。

なんや色々騒いでいるけれども、トランプは神さんの理を知っているから恐怖に勝つ方法を知っている。WHO やパリ協定からの脱退<sup>25)</sup>や、マスクの着用反対、自ら感染をしてお手本を示した。そういう神さんの意識は止められへん。

④ 霊性にかんする協働組織<sup>26)</sup> 世話人（50代女性 滋賀県在住）——聞き取り（2020年11月22日 対面）

現代はゼロ・ポイント・フィールド<sup>27)</sup>で物事を見る必要があり、統合の時代から、融合の時代へと進んでいる。これを統合に引き戻そうとするのがバイデン。マスクの必要性を訴えて恐怖を煽ったあとで、ワクチンを全ての人が打つように仕向けて宇宙意識との融合を断ち切ろうとしている。最初からトランプの勝利は予見できたことで、実質的な勝ちを実現している。

⑤ 霊性にかんする協働組織 世話人（50代男性 西宮市在住）——聞き取り（2021年6月12日 対面）

自分たちの意識がディープステートの残党やアトランティス的なもの<sup>28)</sup>に支配されて次元のシフトに取り残されないように整う必要がある。

以上の現地調査・聞き取り内容はインターネット上に書き込まれたものとほぼ同じであり、今回筆者が扱ったインターネット上での書き込みは精神世界関係者によるとして問題ないと判断した。

(4) 類似点の検証

① 「愛の光」と「早天祈祷」

両者とも朝に重要点を置いている。また、精神世界では「愛の光」は心の覚醒を支援する力とされる（ロウマン 1999：93）。福音派では早天祈祷

について「早天の祈りとその他の祈りとは、そのもたらすものは2倍あるいは3倍以上の差が生まれている」（手束 2014：18）とされ、その効力が説かれている。

② 「“宇宙意識による選び”と“神による選び”」、「レムリアの時代」と“再臨後の新天地”」

1 神的存在からの選びは精神世界では「ライトワーク」と呼ばれ、福音派では「召命」という言葉が用いられることが多い。

精神世界ではトランプの当選は既に宇宙意識によって決められたものとされており、福音派でもトランプが既に神から選ばれている（当選は決まっている）としている。

2 また、両者とも新世界を待ち望んでおり、精神世界では次元上昇後に宇宙意識と融和した時代であるレムリアの時代（松久 2020b：16-22）への移行が近いとしている。福音派では終末にはキリストの再臨があり、その後に神が支配する千年王国期が来るとする（中川 2019：198）。

③ 「祈り」

ここでいわれる祈りは他人のための祈り（中保者としての祈り）を指している。精神世界では他者のために祈ることが自らの浄化につながるとされ、また福音派では聖霊の力を充満し悪霊との戦いに必要なものとされている。

④ 「ディープステート」と「悪の組織」

精神世界では、FBI や CIA を陰で操る政府のコントロールが効かないディープステートという組織が存在し（高島 2020：216）、その実体は悪魔崇拝者とされているが、トランプによって、彼らは既に壊滅寸前だとされている<sup>29)</sup>。一方福音派ではサタンにコントロールされた悪の組織が現れるが後に滅びるとされている<sup>30)</sup>。

## ⑤ 「アセンション」と「携挙」

精神世界では、2012年からアセンション（次元上昇）が始まっており、地球のレベルが引き上げられるとされているが（松村 2012：284）、この次元上昇に魂のレベルがついていけないと生き残れないとされる（松久 2020a：203/648）。

また福音派において、携挙される人にはそれを信じる信仰が必要で、「そんな馬鹿らしいことは信じられない」という信徒らは、艱難時代に残されるとされている（奥山 2002：75-76）。

## 4 日本の福音派とアメリカ大統領選挙

日本の精神世界関係者が大統領選挙について書き込みを行うことについては、「アトランティスからレムリアの時代へ」、「ディープステートによる支配からの脱却」など日本の精神世界はアメリカのそれと価値観を共有することが多い。

しかし先にも述べた通り、日本の福音派とアメリカの福音派では事情背景が異なっているため、「日本の福音派がなぜ他国の大統領選挙に関心を持つのか」について考える必要がある。筆者は、日本の福音派の学生団体に所属する信徒と、JEA 加盟教会牧師からの聞き取りを行い、この問題についての考察を行うことにした。

(1) 日本の福音派の学生及び OB からの聞き取り<sup>31)</sup>

日本の福音派の学生らからの聞き取り内容をまとめると、「今回の選挙でアメリカの闇（選挙不正）が暴かれたことは神に感謝すべきことである。ディープステートがどう動こうと、既にトランプの偉業である WHO やパリ協定離脱は CCP (Chinese Communist Party)<sup>32)</sup>に支配される流れを断ち切った」というものや、「LGBT や人工中絶の容認は、重大な神への罪であるのに、カトリックが（バイデンに対して）思い切った判断を下せないのは、世界全体の資本がサタンの影響下にあり、カトリックも支配を

受けている証明である<sup>33)</sup>」というカトリックへの批判も含んでいた。

また「CCP の狙いはグレートリセット、神はバベルの塔を建てようとした人々を散らされたように、グローバリズムを支持しない」、「神の意志は自分も幸せになり他人も幸せになるという形での融和的ナショナリズムである」、「キリスト教信徒を携挙のときに地上になんとか残そうとする悪魔が支配しているのが CCP」、「悪魔は、携挙からキリスト教徒を神から引き離すためにあがいているおり、アメリカが霊的攻撃を受けている今、日本のキリスト教徒も、世界規模の霊的戦いに備えなければならない」と中国を反キリストとして捉え、霊の戦いを強調していく中で、霊の戦いに対する神の側の代表像をトランプに求めているようであった。

さらには、「国民の平和や利便性を装ったデジタル技術革命、5G 技術を使った監視社会の確立が近い。日本のムーンショット計画はまさに人間から思考を奪うプランで、監視社会への日本の加担が巧みに隠されている<sup>34)</sup>。このやり口はまさに闇の大国にならったやり口である」、「グローバリストはデジタル通信網の発展と監視社会により自分たちから信仰を奪おうとしている」と、大統領選挙の結果が自分たちの信仰生活にかかわるものだという危機感を抱いていた。

## (2) JEA 加盟教会牧師 A (50代男性 兵庫県在住) への聞き取り――

(2021年6月8日 対面)

Aは日本の福音派の共通点として、「信仰歴が短い信徒は、（分かりやすい聖書解説をする）中川牧師の動画に頼ることが多いため、その影響を受けている信徒は相当数にのぼるだろう」という。また、「悪霊との戦い」という分かりやすいテーマを掲げたパワーエバンジェリズムは、超教派<sup>35)</sup>で活動しており参加しやすく、「神の使命に燃えている」という実感を得られるので「若者には魅力的に映るのではないか」ということだった。

Aは、ネット上で福音派の関係者が発信する情報は中川牧師の影響を受けているのではないかとし、「2021年のダボス会議（世界経済フォーラム）で議論される内容についての彼の見解の影響が強くていてるのではない

か」という。

具体的には、同会議のテーマである「グレートリセット」の内容に含まれる「グリーンエコノミ（環境問題への取り組み）」、「デジタル革命」、「貧富の差の解消（大きな政府と新秩序）」などを、「すべてグローバリストによる監視社会を進めるもの」とする中川の主張は多くの福音派の信徒から支持されており、「（中川の）影響を受けた人々は（中川の発信した情報を）当然のこととして受け止めているのではないか」ということだった。中川の主張について確認するために、筆者が数本の動画を閲覧したところ、Aがいていた内容のとおりであることが確認された<sup>36)</sup>。

### (3) 聖書とナショナリズム

これまでの聞き取りを分析すると、なぜ日本の福音派が米国大統領選挙に関心を持ち、情報発信してきたのかについての理由を推測することができる。

彼らはバベルの塔物語からナショナリズムが聖書的であり、グローバリズムは共産主義に繋がり神を認めない世界だとする。彼らはこれを携挙から信徒を遠ざけようとする悪魔の働きだと捉え、霊的戦いによってこれらに打ち勝つ必要を感じている。彼らにとってアメリカ大統領選挙は「世界規模の霊的戦い」であり、何らかの形で積極的に関与しようとし、情報発信をしてきたのではないだろうか<sup>37)</sup>。

## 5 両者のシンクロの発生

これまで見てきたように、大統領選挙について、「精神世界が発信する情報と福音派が発信する情報」は、両者に直接の交流はないものの、似た価値観を持っている。ここでは上述した内容とは別の角度から「なぜ直接交流がない両者から類似した情報が発信されたか」についてを「Qアノン」と「終末論」から考察した。

### (1) Qアノン

Qアノンの発信する情報は、米国福音派だけではなく、日本にも影響を与えている<sup>38)</sup>。そこで筆者は、Qアノンの発信する情報を検証することで、この手がかりが得られると考えた。

#### ① Qアノンとは

Qアノンは、団体のように扱われることが多いが特定の団体ではない。Qアノンは英語圏の匿名掲示板<sup>39)</sup>に書き込みを続けた人物のハンドルネーム<sup>40)</sup>、Qとは国防総省で使われる情報記号のうちトップシークレットに使用される記号である（内藤 2020：72-73）。最初の投稿は、2017年10月28日に書かれた「2017年10月30日月曜日の頭部標準時間午前7時45分から8時30分の間にヒラリー・クリントンは逮捕される——Q」という内容で、特に誰も見向きはしなかったようである（高橋 2021：36）。

Qアノンはその後も様々な書き込みを行っており、「サタニストである『イルミナティ』が『ニュー・ワールド・オーダー（新世界秩序）の構築に向けて第3次世界大戦』を引き起こし、世界人口を5億人まで削減する秘密計画が進行している」、ディープステートという「CIA や FBI などの情報機関が政府のコントロールの利かない機関」が存在する（高橋 2020：216）などの書き込みを次々に行った。

Qアノンの書き込み内容は、「世界は悪魔崇拝者による秘密結社によって支配されている。この国際的な秘密結社はディープステート（闇の政府）やカバール（陰謀団）の強い影響下にある。彼らは合衆国政府を含め、基本的に全ての有力政治家、メディア、ハリウッドをコントロールしているが、その存在は隠蔽されている」（内藤 2021：78）という言葉に要約される。しかし、これらの書き込みは当初、「ネットで消費されては消え去るアングラ系の話の1つ」としてしか認識されず、すぐには大きな問題にはならなかった（高橋 2020：40）。



## ② Qアノンへの支持

高橋康司は、「Qが投稿する情報に格別の面白さがあるわけではない。基本的にQの投稿内容は陰謀論だ。ロックフェラー、フリーメイソン、イルミナティなど、アングラ系サイトで氾濫するキーワードが多数登場する。（中略）あまりにもありふれたものだ。」（高橋 2020：41）としつつも、「Qアノンがこうした情報を投稿欄にただ列挙しているだけだとすれば、トランプ支持集会に『Q』のプラカードを握りしめた人々が高举して押しかける騒ぎにはなっていないはずだ」と問題提起を行っている（高橋 2020：41）。

高橋は、Qアノンが支持される理由の1つとして、Qアノンの投稿は謎解き形式になっており、それを調べていくとアメリカや諸外国の深刻な事態が見えるようになってくることや、投稿を読んだ者が謎問いに興じているうちに世界に嵌まり込んでいくことをあげている（高橋 2020：41）。高橋は、2017年11月6日に投稿された投稿内容であるオバマ大統領の資金援助者、演説の仕方の雛形、他国との関係などは投稿の順番に謎解きをしていくと、そのどれも隠匿された情報ではないにもかかわらず、ニュースソースに突き当たることを例にあげ、Qアノンの書き込み内容が「裏の真実を知ったような」快感を得られる仕組みになっていることを指摘している（高橋 2020：42-50）。

また高橋は、2017年11月3日に投稿されたサウジ政変（同年11月4日）などの、まだ起きていない事件を予見したかのような投稿があること、2017年11月20日にトランプのツイートに「wonderfulday」という単語を入れさせる約束をして翌日に同キーワードが入った内容をトランプがツイートしていることをあげて、このあたりからQアノンの発信情報が「どんなトンデモ系の内容でも漏洩された情報としての現実味」を持ち始めたと分析している（高橋 2020：42-50・53-56・56-58）。

## ③ 共通テーマ「大覚醒」

その他のQアノンの発信する内容は<sup>41)</sup>、先に事例をあげた精神世界関係

者や、福音派のインターネットへの書き込み、聞き取りで得た結果につながっていく。

筆者はこの理由として、Qアノンの支持者が掲げている「大覚醒大覚醒（THE GreatAwakening）」というテーマの影響が大きいと考えている。もともと大覚醒とは英米のキリスト教における信仰の強い覚醒運動で、新たに深い信仰に目覚めたり、信仰を回復する運動を指す（森本 2002：1192-1193）。

しかし、Qアノン支持者がいう大覚醒は、政治、経済、世界情勢、科学技術、医療、地球外生物に至るまで、あらゆる領域で真実が明らかにされ人類の精神的な覚醒が呼び起こされ、人類が秘密宇宙プログラムを支援している第6密度の地球外生物『ブルー・エイビアンズ』の後押しで、新たな次元の世界へとアセンション（次元上昇する）することを指している（高島 2020：94-97）。

Qアノン支持者たちから発せられる大覚醒に関する情報は精神世界がこれまで発信したものと酷似しているが、Qアノン支持者らは聖書の「マラキ書」や偽典「エノク書」を用いて解釈を行うため、その発言は掘り下げて読まないと、キリスト教徒からの情報発信に読めなくもない<sup>42)</sup>。

高島は、「極端な物質崇拜で精神の不安を崩してしまった人たちが、（中略）『人間が神の王国に迎え入れられる』という」宗教回帰運動としての大覚醒と「今回の『大覚醒』運動が過去の運動と共通する点があるのも事実だ」としている。ここから筆者は、Qアノンやその支持者たちの発信する情報を、精神世界関係者と福音派がそれぞれ自分たちの文脈で解釈しているのではないかと考えるのである。

## (2) 終末論

## ① 極限の内圧

現在のような閉塞感がこれまで社会に存在しなかったわけではない。資本主義社会は「無限循環によって成り立っている社会システム」であり、人々はルーチン化された日常の中を走り続けなければならない「時折、無性

に脱線したくなる」と小原克博は評している（小原 2001：47）。また小原は「終わりの見えない繰り返し」が抱える闇について、「その日常を強制的にぶち切る外的な力」の持つ魅力と、「カタストロフィー願望」が現代社会には潜在しているとし、これを「世俗的終末論」と言いあらわしている（小原 2001：47）。

1999年の世紀末に関する予言や、2000年問題に対するエンジニアらの警告は人々に恐怖と同時に「日常をぶち切る外的な力」としての魅力を人々に与えていたともいえる。

しかし、社会は何事もなく21世紀を迎え人々は再びルーチン化された日常を過ごすことになった。

そして、2020年に入り、日常はコロナ・パンデミックという「強制的にぶち切る外的な力」によって切断され、「個人の内奥へと押し込められ」ていた内圧（小原 2001：47）は、極限にまで達した<sup>43)</sup>といえるであろう。

## ② 変化への希求

相容れないように見える精神世界と福音派であるが、両者にとっての重要な時期や事件について並べて記したところ（表1、表2）、同じ時期に似たようなことが起きていることが分かる。

（表1 米国福音派とニューエイジの台頭）

1840年代 ホーリネス運動 1960年-1970年代 第4次大覚醒	1840年代 スピリチュアリズム・神智学 1960年-1970年代 ニューエイジ運動
---------------------------------------	---

（表2 日本の福音派と精神世界の流れ）

1917年-1920年 再臨運動・日本のホーリネス運動 1929年-1933年 美農ミッション事件 1969年 パワーエバンジェリストの台頭 1987年 聖書無誤主義が福音派で採択 (福音派聖書解釈の中心となる)	1908年-1921年 霊術・療術の最盛期 1930年-1935年 霊術への弾圧・衰退 1969年 たま出版設立(オカルトから精神世界へ) 1989年 波動測定器の紹介と理論の提唱 (以後精神世界の技法の中心となる)
--	--

1993年 甲子園リバイバルミッション (初の日本人による大伝道集会) 2010年- 再臨待望会(終末と再臨への期待)
---

1994年 船井・オープン・ワールド (初のブース出店型イベント) 2012年- アセンションの開始(次元上昇への期待)
--

福音派の運動が、日本のキリスト教の中で活発化していくのは戦後だが、戦前にもこれに繋がる動きはあった。1917年には中田重治によって、「新生・聖化・神癒・再臨」という四重の福音を掲げたホーリネス運動が起こった（西原 2002：1048）。同時期に中田や内村鑑三らによって「キリストの再臨は近い」とする再臨運動の集会が行われ、戦前の強勢はこの時期に大幅に伸びている。一方、精神世界に先立つ日本の前期霊性思想（伊藤 2021a：36）の民間精神療法（霊術）はこの時期に最盛期を迎えたとされている（吉永 2019：334）。

しかし両者とも最盛期の直後に、行政当局によって取締・弾圧対象となり、衰退していく。美農ミッションは海外宣教師によって1918年に設立され、幼稚園の設立、寡婦・母子家庭への積極的な保護など積極的な布教を行っていた（麻生 2008：16-17）。しかし、相次ぐ信徒の神社参拝の拒否が当時の新聞に取り上げられ非難的となり、最終的には活動の中断、責任者の検束に至っている（麻生 2008：19-20）。一方、霊術も増加した素人霊術家による医療過誤等の被害が増加し<sup>44)</sup>、取締が強化され衰退していった（井村 1996：315-316）。

戦後になると、日本基督教団から脱退した教会を中心として日本の福音派は勢力を伸ばした。1969年にはパワーエバンジェリズムのさきがけとなった日本リバイバルクルセードが滝元明によって創立された（滝元 1970：216）。同年は瓜谷侑宏が、これまでオカルト・心霊ブームと呼ばれてきた事象について、脱宗教を意味する「精神世界」という言葉を掲げ「たま出版」を創業した年でもあり、書店には「精神世界コーナー」が設けられるようになった（小笠原2019：256）。

滝元順は、1993年に行われた甲子園球場で行われた大伝道集会の準備会から「霊的戦いが始まった」とする（滝元 2007：204）。一方、精神世界では、この翌年の1994年には精神世界市場の中心となるブース出店型イベントのさきがけである「船井・オープン・ワールド」が開催されている（船井 佳川 2008：321/1850）。

1980年代になると、福音派における聖書解釈についての議論がなされ、1987年に「聖書の権威に関する宣言」により、「聖書の無誤性」が日本の福音派の合意として確認された（中村 2000：228-229）。また、精神世界では1989年に江本勝によって「波動測定器」が日本に持ち込まれ（江本 1992：22-25）、以降「人体の全てが波動であり、（中略）昔から人体は小宇宙と呼ばれてきました」（砂生 藤原 1990：38）と波動と宇宙意識を結びつける記事が増えるようになった。波動は、船井幸雄が「世の中で生起するすべての減少は『波動の原理』で説明できます」（船井 2014：67-68）とするように精神世界技法の中心理論として定着した。

この後、福音派では2010年から中川の主催する「日本の霊的覚醒」、「ユダヤ人の救い」、「メシアの再臨」をテーマに再臨待望会が行われており<sup>45)</sup>、再び終末論が展開されるようになった。また精神世界でも同時期から「2012年に地球はアセンションし、新たな次元に人類が突入していく」と強調されはじめ<sup>46)</sup>、時代の変革への期待が高まっていった。「精神世界と福音派」という相反するところから同じような情報が発信されることは一見不可解に思えるが、そこには「霊的停滞感に対する変化の希求」という同一のテーマが見いだされるのである。

「世紀末の世界滅亡」も「2000年問題」も起きることはなかった。福音派では何度も、霊的戦いによって大リバイバル<sup>47)</sup>が起きるとされながらも、信徒数は増えず、精神世界においても2012年に目立った出来事は起こっていない<sup>48)</sup>。

このような中において福音派の中には、コロナ・パンデミックにより、「集って礼拝ができない」、「再臨（携挙）が近いので集う必要がないのではないか」、「携挙に取り残されないよう悪霊との霊的戦いが必要である」

と考える人々もでてきている。また、精神世界には、コロナ・パンデミックを、「次元上昇に伴う霊性による人類の選別がよいよはじまった」と肯定的に受け止める人々も存在する（伊藤 2021：40）。

「反自由主義神学」を掲げた日本の福音派も、「脱宗教」を掲げて成立した精神世界も、反理性主義・反世俗主義であり、その部分においては極めて共通点が多い。「何も変わらない現実」への反動の結果として、両者の間に互いに「意図せぬシンクロ」が生まれたと言えるのではないだろうか。

### おわりに

精神科医の春日武彦は、人々がグッドニュースよりも実際はバッドニュースを好んで視聴することを例にあげて「不気味だったりグロテスクだったり奇怪なもので、しかも不幸な題材を扱ったニュース」に対して人は好奇心をかき立てられるという（春日 2000：1043/2375）。

精神世界にせよ、福音派にせよ彼らが発信している情報は、これまで世間から軽くみられてこき下ろされてきたもの（瓜谷 1983：21）、神学的に常軌を逸するもの（奥山 1992：175）とされてきたものである。

しかし、現在の社会情勢下において発信されている「次元上昇」、「携挙」、「ディープステートの存在」や「悪魔崇拝者の存在」といった情報は、拒絶されないばかりか、好奇心を超えた「カタストロフィー願望」をかなえるソースの1つとして扱われ、多くの共感者を集めはじめている。

筆者は、精神世界と福音派の発信する情報の類似について、「意図せぬシンクロ」という言葉を使った。しかし両者とも現代社会への危機感とそれを打ち壊す力への期待を持っており、そこから発信される「強い類似性を持った情報」の裏には本質的には同じものが存在し、実はこれは、「必然シンクロ」といっても良いのではないだろうかとも筆者は考えるのである。

精神世界には、コロナ・パンデミックから学びや気づきがなかった人は、「さらにもがく地球を体験」することになるのでむしろ、「新型コロナウイ

ルスにかかって、(中略) 死んでしまった人は、それは祝福」(松久 2020a: 203/648・227/648) という主張が存在する。また福音派には、「種まきだけの伝道<sup>49)</sup>だけでも意味があります。なぜならすべての人が『福音を聞く』ことで世の終わりが来るからです」(奥山 2002: 14) という主張がある。ここから彼らは、社会の大変革や終末を期待しているのではないかとすら受け取れるのである。

コロナ・パンデミックが彼らにとって「好ましい時代である」とするのは言い過ぎかもしれない。しかし、1年以上つづく今の社会情勢が、人々に閉塞感を与えつつも、一部の人々にはそれまでの日常から非日常への変化という刺激を与え、「内奥へと押し込められていた内圧」を吐きださせていることも確かである。

本論文は、コロナ・パンデミックにおける現在の社会情勢についての説明として一般化されるものではない。しかし筆者は、1年以上続く閉塞した社会において起きている1つの現象の分析により、現在の社会情勢の一面を切り取ることができたと考える。

## 注

- 1) 「自己自身の意識を高いレベルに変容させ、『宇宙意識』に融合していく」(島蘭 1992: 54) とする霊性(霊的)進化論で、そのために霊能的技法への目覚の促進や環境保護まで幅広い活動をしている。
- 2) 近代科学の成果を神学研究が受け入れ、社会の世俗化の傾向の持つ積極面を評価する神学(寺園 2002: 528)
- 3) ニューエイジは精神世界と「同じものと見るのは適切ではない」が「まったく独立した個別の現象と見るのも正しくない」(島蘭 2007: 46) とされており、その中心となる根本思想は同じものであるため、本論文においてはこの両者を同じものとして扱う。
- 4) 福音派に限らず日本のキリスト教では欧米のニューエイジと日本の精神世界についての区別をしておらず、全てを「ニューエイジ」という言葉で括ることが多い。
- 5) 1951年に創設された福音派の世界的な組織で、2002年の時点で120の国から1.5億人のメンバーにて構成されている(千代崎 2002: 674)。
- 6) 「日本福音同盟」(<https://jeanet.org>) 2021年7月9日閲覧。
- 7) 日本福音同盟「天皇の代替わりに際しての声明」(<https://jeanet.org/commissions/>

social-commission) 2021年7月9日閲覧。

- 8) 分類にあたっては、JEA 加盟教会牧師、同教会役員、複数の福音派信徒からの聞き取り及び文献から筆者が行った。
- 9) 一例をあげると「6日間の天地創造」を文字通り24時間×6日と解釈する。イスラエルは選ばれた民なのでイスラエルの祝福のために祈るなどの親イスラエル運動もこれに含まれる。
- 10) 世界に疫病、キリスト教徒の迫害、地震や天災、飢餓、戦争が起きる時代。
- 11) 神学的にはデイスペンセーションリズムと呼ばれているものがこれにあたるが、本論文は神学的解釈をするものでないため説明は割愛する。
- 12) 現在は動画配信を主として活動しており、チャンネル登録者数は6万人超、500本以上のアップされた動画のほとんどが1万回以上再生されている(<https://www.youtube.com/c/HarvestTimeMin/featured>) 2021年7月10日閲覧。
- 13) 悪霊の束縛の具体例には、墮胎、幼児期の性的虐待、猜疑心、不安感などがあげられている(尾形 2003: 49)。
- 14) 「油まき」も地域の悪霊を追い出すための行為の一環で、パワーエバンジェリズムと関連しているとされる——JEA 加盟教会牧師(50代男性)への聞き取りにもとづく(2021年6月8日)。
- 15) 祖先の罪は、過去に親や祖父母が行った初参り、七五三、成人式、鯉のぼり、出産祈願、地鎮祭などがリストとして細かくあげられている(尾形 2003: 45-46)。
- 16) 星座占い、タロット、トランプ、新聞の占い、水晶占い、呪文、マントラ、降霊術、チャネリングなど(尾形 2003: 47-48)。
- 17) 地域の悪霊を追い出すために隊列を組んで悪霊がいるとされる地域を祈りながら歩く。
- 18) 担当者を決めて1人が1時間づつ祈り24時間祈りが途切れないようにする。大きな集会の時には集会の開催期間中祈りが継続されることもある。
- 19) JEA 加盟教会役員(50代男性)への聞き取りにもとづく(2021年6月14日)。
- 20) インターネット上での書き込みは2020年10月11日の Facebook から引用した。既に削除されている書き込みについてはスクリーンショットに保存していたものから書き出した。
- 21) それぞれどの部分が類似しているか分かるよう下線を引いていた。
- 22) ここではアセンションを指していると思われる。
- 23) 神と人とを繋ぐ仲介者としての祈り(白浜 2002: 825)。
- 24) 現地調査及び聞き取りは、文学研究科院生協議会「学術調査に関するガイドライン及び倫理規定」によって行った。また被調査者名は基本は匿名とし、文献に名前が出てくる人物に関しては本名とした。
- 25) 後述するが福音派もこの2点をトランプの功績としている。
- 26) 同じ目的(聖地の保守や精神世界技法によるケア)のために精神世界関係者が協働している組織(伊藤 2021b: 7)。
- 27) 過去・現在・未来のすべての情報をその微小空間に固有の波動として記憶して

- いる領域。
- 28) レムリアの対局にある統合された世界（松久 2020b：21-22）
- 29) ディープステート対トランプの戦いについては、まだ続いているという書き込みもあるが悪魔崇拝者が負けるシナリオはできているなどトランプの勝利は規定路線として情報発信されているものが多い。
- 30) 『聖書』ヨハネの黙示録13章-19章を書き込み者が独自解釈したものと思われる。
- 31) 聞き取りは福音派の神学生から同団体の主事を紹介してもらい、2020年9月1日-11月30日の間に、学生やOBら8人から行った。団体名や属性等の詳細については「発言から個人を特定される可能性があるので公表は避けて欲しい」と同団体主事から申し入れがあったため非公開とする。
- 32) 福音派には中国を世界新秩序（統一国家）の象徴として見る人々が少なからず存在している。
- 33) 福音派の中にはカトリックを「他宗教との行き過ぎた交流によって悪霊との交流を開いて」いる（尾形 1996：252）と批難する教派・教会もある。
- 34) 内閣府から発表されている計画で、2050年までに、サイバティック・アバターを基盤とし、人が身体、脳、空間、時間の制約から解放された社会を実現しようという政策（「内閣府」<https://www8.cao.go.jp/cstp/moonshot/sub1.html> 2021年7月12日閲覧）。
- 35) 所属教会や教派を問わない。
- 36) 「中川牧師の書斎から」1-45（<https://subsplash.com/messagestation/lb/ms/+fbk4swq>）2021年7月27日閲覧。
- 37) Aの教会で定期購読している雑誌にもトランプ大統領の再選のために祈ることを促す記事が掲載されたいという。
- 38) 先の学生らへの聞き取りにおいても、ニュースソースをQアノンに求める学生が4人いた。
- 39) 現在は元2ちゃんねる（日本の匿名掲示板）の管理者であった西村博之が管理をしている。「ひろゆき氏、米匿名掲示板『4chan』を買収し、管理人に」ITmedia エンタープライズ（<https://www.itmedia.co.jp/enterprise/articles/1509/22/news024.html>）2021年7月29日閲覧。
- 40) アノンは anonymous（匿名の）という意味でQアノン自身は「Q」と名乗っている。
- 41) （高橋 2020）、（内藤 2021）など。
- 42) 実際にインタビューをとった中にはQアノンやその支持者は米国福音派キリスト教徒だと思っている学生が複数含まれていた。
- 43) 小原は内圧が極限にまで達することについて「その深刻さは時として犯罪という形で露呈する」（小原 2001：47）とオウム真理教事件を説明している。
- 44) 当時は無資格で医療行為を行う者や、遠隔療法を行うとして患者を集めたが実際は何もせずにその時間に寝ていた霊術家などが横行していたという（井村 1996：306-310）

- 45) 「再臨待望聖会」（[https://harvesttime.tv/celebrations/cat\\_celebrations/sairin](https://harvesttime.tv/celebrations/cat_celebrations/sairin)）2021年7月13日閲覧。
- 46) 2005年のアセンションをタイトルにした書籍の5倍の書籍が2010年から2012年に流通している（書籍流通サイト Honya Club <https://www.honyaclub.com> 2021年7月11日閲覧）。
- 47) 日本においては信徒数の急増加を指す。
- 48) 現在精神世界では、人類は過去6度のアセンションに失敗しているが、2012年からゆるやかに始まったアセンションはコロナショックにより強く促され、加速し始めたとされている（吉濱 2020：559/2305・580/2305）。
- 49) 入信を期待せずにキリスト教の救済観を伝えること。

## 文献一覧

- 麻生将 2008「宗教集団をめぐる社会——空間的排除のプロセス」『歴史地理学』50-3（歴史地理学会）
- 伊藤耕一郎 2018「精神世界の再考察——宗教との関係から——」『関西大学 哲学』第36号（関西大学哲学会）
- 伊藤耕一郎 2020「精神世界を問い直す」『千里山文学論集』第100号（関西大学大学院文学研究科）
- 伊藤耕一郎 2021a「心霊科学と精神世界：2つの霊性文化」『ちさとやま——百日物語』（関西大学大学院協出版部）
- 伊藤耕一郎 2021b「霊とマスク——コロナ禍における精神世界の实情——」『院祭新状態2020』（関西大学十院生協議会）
- 井村宏次 1996『新・霊術家の饗宴』（心交社）
- 瓜谷侑宏 1983『深層自己の発見』（たま出版）
- 江本勝 1992『波動時代への序幕——秘められた数値への挑戦』（サンロード）
- 小笠原英晃 2019『輝く人生を送るためのスピリチュアルガイドブック精神世界の歩き方：スピリチュアルリーダーたちから教わったこと』（BAB ジャパン）
- 尾形守 1996『ニューエイジムーブメントの危険——その問題点を探る』（プレイズ出版）
- 尾形守 2003『聖書にみる霊の戦い』（プレイズ出版）
- 奥山実 2002『世の終わりが来る！』（マルコーシュ・パブリケーション）
- 春日武彦 2000『不幸になりたがる人たち——自虐指向と破滅願望』Kindle（文春新書）
- 川村邦光 2007『憑依の近代とポリティクス』（青弓社）
- 栗田秀彦 塚田穂高 吉永進一『近現代日本の民間精神療法——不可視なエネルギーの諸相』（国書刊行会）
- 小原克博 2001「終末思想から見た韓日社会の過去・現在・未来の課題」『基督教研究』（基督教研究会）
- 砂生記宜 藤原肇 1990『宇宙波動と超意識——宇宙と生命の神秘を探る』（東明社）
- 島蘭進1992『新新宗教と宗教ブーム』（岩波ブックレット）

- 島蘭進1996『精神世界のゆくえ——現代世界と新霊性運動』（東京堂出版）  
 島蘭進2012「ニューエイジ系宗教」山折哲雄監修『宗教の事典』（朝倉書店）  
 島蘭進2020『新宗教を問う：近代日本人と救いの信仰』（ちくま新書）  
 白浜満「とりなし」大貫隆 名取四郎 宮本久雄 百瀬文見編集『岩波キリスト教辞典』（岩波書店）  
 鈴木崇巨 2019『福音派とは何か？——トランプ大統領と福音派』（春秋社）  
 第6回日本伝道会議 2016『データブック日本の宣教のこれからが見えてくる』（いのちのことば社）  
 高島康司 2020『Qアノン 陰謀の存在証明<ディープステイト>が偽装する<大覚醒フェイク>』（成甲書房）  
 滝元明 1970『われ土方なれど』（いのちのことば社）  
 滝元順 2007『霊的戦いと教会の問題解決能力』（地引網新書）  
 田中聡 2014『陰謀論の正体』Kindle（ちくま新書）  
 千代崎秀雄 2002「福音派」大貫隆 名取四郎 宮本久雄 百瀬文見編集『岩波キリスト教辞典』（岩波書店）  
 手束正昭 2014『朝早く、主に叫べ——早天祈祷の意味と力——』（地引網新書）  
 寺園喜基 2002「自由主義神学」大貫隆名取四郎宮本久雄百瀬文見編集『岩波キリスト教辞典』（岩波書店）  
 内藤陽介 2021『誰もが知りたいQアノンの招待——みんな大好き陰謀論II』（ビジネス社）  
 中村敏 2000『日本における福音派の歴史——もう一つの日本キリスト教史』（いのちのことば社）  
 中川健一 2019『ディスパenserシヨナリズム Q&A』（ハーベスト・タイム・ミニストリーズ）  
 根田祥一 2021「アメリカの福音派と日本の福音はどう違うの？」『百万人の福音』5月号（いのちのことば社）  
 Sylvia D.Pearce 2007『THE NEW AGE MOVEMENT WHAT IS IT?』Kindle（Christ, Our Life Ministries）  
 西原廉太「ホーリネス教会」大貫隆 名取四郎 宮本久雄 百瀬文見編集『岩波キリスト教辞典』（岩波書店）  
 藤本満 2015『聖書信仰<上>』Kindle（いのちのことば社）  
 船井幸雄 佳川奈未 2008『船井幸雄と佳川奈未の 超★幸福論』Kindle（ダイヤモンド社）  
 船井幸夫 2014『未来への言霊——この世の答えは既にある』（徳間書店）  
 堀江宗正 2021「メディア史の中のスピリチュアリティ」『福音と世界』5月号（新教出版）  
 松久正 2020a『地球人類よ、新型コロナウイルスを浴びなさい!』Kindle 版（ヒカルランド）  
 松久正 2020b『イルミナティとフリーメイソンとドクタードルフィン』（ヒカルラン

- ド）  
 松村潔 2012『精神世界の教科書』（アールズ出版）  
 水草修治 1995『ニューエイジの罫（改訂第一版）』（CLC 出版）  
 宮崎聖輝 2018「聖書信仰の成熟を求めて——神学委員会の取り組み」『JEA ニュース』No52（日本福音同盟）  
 最上光弘 2014「罪責告白からの出発」『罪責を告白する教会——真の合同教会を目指して——』（日本基督教団 関東教区）  
 吉濱ツトム 2020『2040年の世界とアセンション——アセンションが加速した「2040年の世界」はどのように変容しているのか』Kindle（徳間書店）  
 森本あんり 2002「リバイバル・ムーブメント」大貫隆 名取四郎 宮本久雄 百瀬文見編集『岩波キリスト教辞典』（岩波書店）  
 森本あんり 2015『反知性主義——アメリカが生んだ『熱病』の正体』（新潮選書）  
 サネヤ・ロウマン 1999『魂の愛——3つのハートセンターを覚醒させる』佐藤京子訳 高木悠鼓監訳（マホロバアート）

※Kindle 版の端末は iPadpro（第1世代）を使用。

#### 参照インターネット一覧

- 「再臨待望聖会」([https://harvesttime.tv/celebrations/cat\\_celebrations/sairin](https://harvesttime.tv/celebrations/cat_celebrations/sairin)) 2021年7月13日閲覧。  
 「新型コロナワクチン Q&A」厚生労働 (<https://www.cov19-vaccine.mhlw.go.jp/qa/0053.html>) 2021年7月6日閲覧。  
 「内閣府」(<https://www8.cao.go.jp/cstp/moonshot/sub1.html>) 2021年7月12日閲覧。  
 「中川牧師の書斎から」1-45 (<https://subsplash.com/messagestation/lb/ms/+fbk4swq>) 2021年7月27日閲覧。  
 「日本福音同盟」(<https://jeanet.org>) 2021年7月9日閲覧。  
 「ハーベスト・タイム・ミニストリーズ」(<https://www.youtube.com/c/HarvestTimeMin/featured>) 2021年7月10日閲覧。  
 「ひろゆき氏、米匿名掲示板『4chan』を買収し、管理人に」ITmedia エンタープライズ (<https://www.itmedia.co.jp/enterprise/articles/1509/22/news024.html>) 2021年7月29日閲覧。  
 「HonyaClub」<https://www.honyaclub.com> 2021年7月11日閲覧。